

章炳麟における排満思想の形成とアイデンティティの変容

林 義 強

かつて、シュワオルツは嚴復について、「中国文化が嚴復の中に深く浸透していただけではなく、十九世紀末葉の中国に特有な社会、政治、思想状況が彼を巻き込んでいた」と指摘したことがある⁽¹⁾。それはそのまま章炳麟においても当てはまる。本稿は、章炳麟という一個人の思想形成にまつわる特有な社会、政治、思想状況が、清末国学をはじめとした諸文化論を最初から同様に巻き込んでいたことを念頭に置きながら、その排満思想の形成過程とそのアイデンティティの揺れを章炳麟の武漢、台湾、日本、上海を転転した経歴において考察することを研究課題とする。

章炳麟の排満思想について、すでに多くの先行研究がある。しかし、そのほとんどは章炳麟の政論文あるいは政論的な文章のみを取り扱い、研究時期も排満思想形成後の時期に限られている。しかも、章炳麟の自述や解説をそのまま踏襲し、その排満言論をあたかも生まれ付きのもののように、複雑な形成過程を経ることもなく自然に噴出したものと考えられる傾向が多く見られる。本稿は、主に一八九六年から一九〇一年までの期間に絞って、詩作や手紙ないしは詩文の題名、語り口、言葉遣いとペンネームなど従来の研究に重要視されてこなかった資料を用い、それまで深く考察されてこなかった部分のみを取り扱うこととする。それによって、その形成時期における微妙な思想変化を捉え、

章炳麟における排満思想の形成とアイデンティティの変容

その形成過程を再構成しながら、初期章炳麟思想の真相を明らかにしようとする。

記憶と現実の相乗効果

章炳麟の自述によれば、彼の排滿思想は少年時代に『東華録』など読んでから萌したものである。その思想生成については度々言及されたが、それを整理して見れば、前後の自述には、具体的な時期について、多くの食い違いが見られる。その食い違いを通じて、彼における排滿思想が萌えはじめた時期の真相の一角を窺うことができる。

章炳麟が自らの排滿思想の形成を披瀝したものとしては、一九〇〇年の孫文への手紙が最初のものである。その中で、

私は、学の道に入り、はじめて『東華録』を読んでより、深く滿州族の皇帝を憎み、これを必ず滅ぼさんことを誓った。⁽²⁾

とあり、『東華録』の影響を言及した。それは「学の道に入った」段階の出来事であると提示してあるが、具体的な時期については明示していない。

次には一九〇三年五月の「致陶堃魂、柳人権二子書」で、『東華録』を読んで排滿意識が台頭したのが「十四五歳」頃のことであると言明した。

私は十四五歳の時、蔣氏の『東華録』を読み、逐滿の志がすでに有った。⁽³⁾

しかし、二ヶ月後の「獄中答新聞報」では、それが「十六七歳」頃のこととなっていた。

十六七歳時、蔣氏の『東華録』、『明季稗史』を読み、揚州、嘉定、戴名世、曾静のことは胸の中に勃然とした。その後、鄭所南、王船山両先生の本を読むと、保衛漢種といったような話ばかりで、民族思想は次第に高まったのである。⁽⁴⁾

一九〇六年の「東京留学生歓迎会演説辞」は、それについてより詳しく述べているが、具体的な時期に言及していない。

私は少年時代に、蔣氏の『東華録』を読み、その中の戴名世、曾静、查嗣庭などの事件で、胸の中から怒りを覚え、異種が中華を乱すことがわれわれの第一の恨みと思うようになった。⁽⁵⁾

以上は、章炳麟が排滿革命の最強のイデオログとして鳴っていた時期の言及であるが、その志が実現した後も引き続き数回の言及がある。一九一三年の「光復軍序」において、章炳麟は、自らの排滿思想の萌えはじめた時期を「十三四歳」としたが、一九三三年「民国光復」講演では、「成童の時」となっている。最も詳しく当時のことを触れた『口授少年事蹟筆記』では、それが「十二歳」となっている。

私は十二歳の時、母方の祖父朱左卿に讀経を教わっていた。たまたま蔣氏の『東華録』で曾静事件を読むと、祖父は「夷夏の防は君臣の義と同じである」と言った。……私は言った。「明朝は清朝に亡ぼされるよりも、李自成に亡ぼされたほうが良かったです」。……私の革命思想はそこに根が付いたのである。祖父の言葉に沿って考えれば、種族革命の思想がもともと漢人の心の中であり、ただ隠れて顕われていなかっただけである。⁽⁶⁾

ここでの「十二歳」というのは、諸記録の中で「最年少」である。なお『民国章太炎先生炳麟自訂年譜』にはそれに関連した記録がないが、『口授少年事蹟筆記』と同じように、少年時代には、王夫之や顧炎武をまだ読んだこと

がなかった、との記述がある。

以上に列挙した資料では、自述の時期が遅ければ遅いほど、記憶した排滿思想の生成時期が早くなっていることが示されている。その時期については、一七歳から一一歳までさまざまであり、一致していない。そして、自述の時期が遅ければ遅いほど、回想の内容も漠然とした読書経験から次第に明晰な思想形成となり、「排滿」についての態度も曖昧なものから明確なものになっていく。その不一致ないしは矛盾は記憶の誤差か、それとも故意の嘘かを判断することは、決定的な証拠を集められない今はもはや無理であろう。問題はむしろ、記憶の誤差あるいは故意の嘘であるかどうかを決め付ける必要がなく、回想談の当時の考えがその早期の記憶を無意識のうちに次々と改竄したことからたらしめた現象として捉えられる側面に注意を払うべきであろう。その形成時期を次々とより早い時期に繰り上げたことには、その思想がより根深いものであることを強調しようとした意図が窺える。それらの回想談を通じて確認できるのは、その少年時代の記憶ではなく、むしろ各回想談を披瀝した当時のこうした意図である。そこには、回想した当時の現実と少年時代の記憶と相俟って、その相乗効果によって、自らの排滿意識をより強く強調しようとした姿が浮き彫りになっている。

しかし、逆説的には、それらの回想は少なくとも、章炳麟の中の排滿意識が後年に自分が叫んだように生まれつきのものではないことを証明してしまったのである。とはいえ、こうした時間的な矛盾があったということは、その意識の生成ということ自体の真实性を否定したものではない。章炳麟が自らの読書経験について度重ねて言及した『東華録』は、雍正までの清朝歴史を編集したものであり、いわば一種の「史」である。その「史」は王夫之や顧炎武の「子」より先立て、章炳麟思想の基盤作りの材料となったわけである。言い換えれば、その排滿思想は最初から、理

論よりも史料から生成したものと考えられる。その中でとくに虐殺と圧政についての史料は、十代の章炳麟に強いインパクトを与えたにちがいない。それらは後年の排満言論においても重要な立論の根拠として、彼の思想の中で生き続けていたのである。

章炳麟における排満意識を培養するという点において、上に列举したような読書経験より意味深いことがある。彼が自ら書いた家族伝記である「先曾祖訓導君先祖國子君先考知臬君事略」によれば、その家族には、清朝を受け入れない意志を隠して代代伝えてきた象徴的な儀式があった。それは埋葬の時に清朝の服を拒否し、「深衣」という上古時代の中国人の服を着る、ということである。

(父は)嘗て穩やかに言った。「我が家は清朝に入ってからすでに七八世代を経たが、死人には皆深衣を着せて埋葬した。私は政府に職を得ているが、吏部に詣でることはない。私が死んだら、家教に違反するまい、清朝の服飾を加えないで下さい」。私はそれを聞いて、とても感動した。⁽¹⁾

七八世代にも渡った伝統であるため、その儀式についての話は信用できると判断できる。服を重んじる儒家の風土の中で、その儀式を通じて、章炳麟は清朝の臣民というアイデンティティに違和感を抱いたことは十分に考えられる。埋葬の時に清朝の公定制服を拒否するという遺言を父親から託された時、彼がそれを肌で深刻に感じたことが想像できる。しかし、その家族は、すでに清朝政府の一員となっており、反抗の意思もなければ、章炳麟にそれ以上のことも教育していなかった。そこには、ただ淡々とした無念さが漂っていたように見える。その代々伝承してきた象徴的な儀式と無念さは、顕在的ではないものの、早年の読書経験とともに、章炳麟における排満意識を育成する土壌となっていたと考えられる。

叛逆意識の台頭

章炳麟における排滿思想の現れが確かな文字資料によって確認できるのは、一八九八年のことである。それに先立って一八九七年に、孫文の事を聞いて、同志がいることを密かに喜んでいたという後年の回想録があるが、傍証できる資料がないため、ここでは、判断に資する根拠としては採用しがたい。一八九八年のその年、章炳麟は二一歳となり、春には張之洞の招きに応じて武漢に行き、それは広い意味で張之洞の幕府に入ることを意味した。夏には張之洞に追放された。秋にはクーデターによって変法運動が失敗したのを受けて、台湾へ避難した。そして、冬には台湾で『嘔書』を編集し始めた。それから半年後、日本に渡った。

その年の章炳麟思想を考察するには、まず次のような問題から始めるべきであろう。わずか数ヶ月の付き合いを経た後、張之洞はなぜ章炳麟を追放しなければならなかったのか？その短い期間に、章炳麟の思想には、何が起こった、あるいは何か現れてきたのだろうか？

変法派に齟齬を感じた章炳麟は、実力者としての張之洞に違ふ可能性を見出そうという思いがあった。武漢滞在期間中、張之洞はその生涯で最も重要な著述である『勸学篇』を書き上げ、章炳麟にコメントを求めた。しかし、章炳麟はその著作を通じて張之洞の限界を見抜いた。『勸学篇』は九つの内篇と十五の外篇から構成され、「内篇務本、以正人心；外篇務通、以開風氣」と張之洞が自称したが、章炳麟は外篇のみを「翔実」（つまり「詳実」）、「時勢に合っている」と評価し、張之洞が肝心であると自認した内篇について言及を避けた。それは、実際に心の中ではそれを否

定したものの、口には言い出せない心理によるものといえる。その理由は後年の「艾如張董逃歌序」で明らかにされた。その中で章炳麟は、滿州族が漢民族を三百年近くにわたって抑圧してきた歴史を強調し、その王朝に対して『勸学篇』が力説したような「忠」を表す必要性を否定した。⁽⁸⁾ その後の章炳麟の言動、とくに張之洞の側近である梁鼎芬との確執を通じて、張之洞は章炳麟を忠君思想に欠けた危険な人物と断定した。

しかし、以上のようなことについては、当時では明確な記録がない。信憑できる根拠を得るためには、当時残った僅かの詩文作に注目すべきである。人の思想が微妙に変化していく時には、その思いは論文などよりも詩作に託しやすいというの是一般である。章炳麟の場合はまさにそうである。武漢を離れた直後、章炳麟は「艾如張」と「董逃歌」という二つの詩を作った。それは、ここで重要な手掛かりとなる。

詩のタイトルには、微妙なメッセージが重層的に託されている。「艾如張」はもともと漢樂府の軍樂で、鑿歌十八曲の一つであり、原詩は、鳥が飛んでいたのに、雑草を刈り、綱を張って鳥を待つことを皮肉るものである。その皮肉は張之洞の忠君思想にもあてはまる。さらに、「張」を張之洞を指す言葉と読む場合、「艾」は「後悔する」、「如」は「付く」という意味があるため、その詩題は張之洞に追隨したことを後悔している、とも解釈できる。このような多義性によって、章炳麟は複雑な心境をこの古い詩題に秘めようとした。その当時の思いはこの詩の最後の部分からより多く読み取ることができる。

皇穹鑑黎庶、均平無九服。

(天は民衆を照らしており、平等で九服の差はない)

顧我齊州産、寧能忘禹域。

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

(しかし我は齊州人であり、禹域を忘れるわけにはいけない)

擊磬一微秩、志屈逃海濱。

(擊磬担当のような低い地位の人なので、志が実現できなくて海濱へ逃げる)

商容馮馬徒、逝將除受辛。

(商容は馬徒の力を借りて、紂王を倒そうと誓った)

懷哉殷周世、大沢寧無人。

(殷周時代を懐かしく思い、民間には叛乱しようとする人がまさかないのか！)⁽⁹⁾

「齊州」と「禹域」とも中国という言葉の言い回しであり、その中国を守る志が挫折した今、反抗するリーダーの出現を待ち望んでいる心情がここで披瀝されている。注目すべきは、この時点ではクーデターがまだ起こっておらず、変法運動は全盛期にあり、多くの人がそれに希望を寄せていたことである。しかしながら、ここで商容が殷の紂王に反抗しながら失敗したという典故が用いられたことは、変法運動の方針に疑問を感じたのみならず、それが最終的に成功できないだろう、という予感が章炳麟の心の中にあつたことを示している。そして、「大沢寧無人」という表現は、中国語として、王朝を転覆する意味合いを強く帯びたものである。その道へ志を新たにしようとしている時には、康有為や梁啓超、そして張之洞との付き合いを経て、同志がいらないことへの失望感は抑え切れないものがあつた。まだ漠然としているが、章炳麟の目は新たな方向へ向けられなければならないならなかつた。

その新たな方向は、「董逃歌」においていくらか明確になっている。「董逃歌」は、漢樂府の琴や簫で伴奏する歌詞「相和歌辞」の一つであり、もともとは漢末の董卓の失脚を歌う民謡である。清朝の皇帝たちは自らの祖先の姓が董

である、と自認していたため、「清王朝が滅亡する」という意味合いが、密かにその「董逃歌」というタイトルに込められている。詩の中で、次のような個所には、異民族支配への反抗意識と清朝転覆の意志が「艾如張」よりはっきりと確認できる。

自昔宋南徙、垢氛流未央。

（昔宋が南に遷移して以来、汚い空気は流れ続けている）

九域尊委裘、安問秦与羌……

（今の中国は異民族を尊び、民族の区別も問わない）

吾衰三百年、刑天丞舞干……

（我々は三百年間も衰退しているが、刑天が帝位を奪おうとして首が切れても武器を操り続けるように頑張ってきた）

秦帝不蹈海、帰蒔千竹竿。

（秦が中国を統一したような時が来れば、私は魯仲連のような海での入水自殺を選ばず、うちに帰ってたくさん竹を植えようとする）⁽¹⁰⁾

清朝の支配は、かつての元朝のそれに喩えられ、中国固有文化の衰退と民族アイデンティティの混乱を招いたものとして、非難されている。その支配の下で、三百年近く弱体化してきた今、新政治が期待されている。章炳麟は、その時が来れば、つまり、清王朝が倒れば、清の遺民として自殺するのではなく、喜んでそれを受け入れ、自らの志が実現したとして隠退生活を送りたい、と表明した。この詩において、叛逆の意志はそれまでない勢いで前面に出て

いる。

この時期の章炳麟の諸作を探った結果、異族支配と専制帝政への叛逆意識を確認できるものとして、上記の二作が最初である、と考えられる。従来の研究では、章炳麟が「排滿革命」を主張したのは変法運動が失敗してからの思想変化によるものである、という見方が大方である。しかし、これまで見てきたように、詩に潜んだこのような感情と意思を、その本人の論文を通じて確認できるのはより後のことである。詩は論文より曖昧ではあるが、意識の芽生えというようなことをより敏速に、直感的に反映できることがしばしばある。従来の見方は、研究資料を章炳麟の論文に限った上での結論であり、思想史研究の資料として、詩作は常に軽視されがちであった、といわざるをえない。

康有為が光緒皇帝に改革の希望を託していた時期に、章炳麟はすでに清王朝それ自体に絶望し、満州族による支配を拒否する必要性を感じ、そのための心の準備ができていた。しかし、どのような政治によってそれに取って代わるべきかについては、彼の中ではまだ明確なものとなっていなかった。このような状態の中、支配者としての満州族に対する嫌悪感と早年の読書や家族史から獲得した被征服の記憶がまず、浮上してきた。それは結果的に、満州族に対する敵意を編み織り、現れはじめた叛逆意識の内実として、民族的感情が宛がわれていくのである。とはいえ、この時点の章炳麟は、まだ「排滿」まで至っておらず、名づけようとすれば、それは「讐滿」である。実際にも、章炳麟は、「排滿」という言葉を使う前に、「讐滿」という言葉を使っていた。

それゆえ、上記の詩にも見られるが、章炳麟はこのような感情を明白に表現するには躊躇していた。彼の詩にも論文にも、清朝と同じく異民族支配の元朝とモンゴルへの言及がそれから突如出現した。それらは明らかに清朝と満州族のことを述べようとしたものであるが、元朝とモンゴルの名を借りて本音を偽装しようとしたものである。中国本

土を離れる直前に発表した最後の論文「蒙古盛衰論」はその偽装あるいは忌諱のテクニククの代表作といえる。

同類にしてその国を支配するのは、帝という。異類にしてその国を支配するのは、篡という……臣によって君を奪うのは、一姓の神器を奪うという。異類によって中夏を奪うのは、万億人の分地を奪うという。かのモンゴルが中国に対するは、トルコがギリシアに対するようなものである。蚕食して数百年を経ても、君臣の義を持つてはいけない。まして狼鹿の種（に対してはなおさら）である。⁽¹¹⁾

思想を隠しやすい詩の手法が、この論文にも応用されている。ここでは元朝とモンゴルの名を指し征服民族を強く非難しているが、そのまま清朝と満州族にも同様の論理を適用できる、と念頭に置いていたにちがいない。章炳麟にとって、両方とも「異類」であることは変わらないからである。「蒙古盛衰論」は、これまでにない露骨さで異民族に対する嫌悪感と被征服の屈辱感を披瀝している。国家と文化が深刻な危機に直面していた時期に、章炳麟は問題解決の糸口を民族問題においてつかもうとした。「民族」を切り口にすれば、「君臣の義」が成り立たなくなり、それによって支えられている今の王朝政治もより簡単に取り壊すことができる、と彼は感じた。征服民族に対する批判と忠君思想に対する批判は、章炳麟の思想において絡み合いながら平行して進行したが、やがて一つの課題として統一される可能性が現実となっていく。それは後に「排滿」と「革命」の結合となった。しかし、この時期では、大胆な言論とはいえ、清朝と満州族に直接に言及することはまだ忌諱されていた。

クーデターが発生してから一ヶ月後、章炳麟は『亜東時報』の日本人の安藤陽洲と山根虎臣の勧めで台湾へ避難した。出発する直前に、章炳麟は叛逆の志を再び詩に託した。

溟滓弟堯舜、而不訾版泉

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

(平等な仁政を唱える堯舜も尊敬するが、黄帝が蚩尤を倒した版泉戦争も非難しない)
版泉竟何許、志違時亦遷……

(なぜ版泉戦争を賛えるのか？自分の志が実現できず、時も変わったからである)
何不誦大明、為君陳亥午……

(なぜ「大明」を読まないか？君らに革命のことを話そう)
既不還重華、安事涕滂沱。

(舜に遇うことができない以上、雨のように涙を流しても無駄であるう)
蓬萊青未了、散髮將凌波。

(蓬萊はまだ茂っており、私はまもなく髪を振り乱して海を渡る)⁽¹²⁾

この詩には、多くの歴史材料が典故として使われている。版泉は、伝説中の黄帝と蚩尤が激戦した場所である。「大明」は『詩経・大雅』の中で周武王が尚紂王を滅ぼそうとした戦争を詠う一篇である。章炳麟はこの二つの戦争を持ち出すことによって、異民族と旧王朝に対する武力も辞さない革命への賛意を示した。この詩を含み、上に引用した諸作の中で、そのような革命を導くリーダーの存在を探していることが、繰り返し表明されている。章炳麟は、康有為、李鴻章、張之洞にその希望を前後して託していたが、台湾へ出発するその時点では、「既不還重華」という一句でそのすべてを否定した。その失望感と期待感は、後に孫文をまさに「重華」(すなわち舜)のように絶賛することにつながっていくものだと見える。⁽¹³⁾

中国本土を離れること

章炳麟が詁経精舎を出てから中華民国成立まで居住したところは主に、上海、武漢、台湾、東京である。短期間に滞在した武漢を除けば、残りの三つはいずれも中国ではない、あるいは完全に中国といえなかった場所である。当時の上海は租界という外国人居留地であり、「華洋雑居」が公認されており、司法権、行政権、裁判権ないし一部の領土主権を持つ「国の中の国」であり、事実上の外国領である。⁽¹⁴⁾ 当時の台湾は日本の植民地となっており、それ以上に「外国度」が高く、そして東京になると完全な外国となる。そういったところでの滞在経験は、従来の華夷思想や「天下」観念ではなく、近代国際秩序と国家原理において中国を考える視角を章炳麟にもたらした、と考えられる。

章炳麟が滞在していた台湾は、日本の植民地支配の下、中国本土と異なった政治と社会を営んでおり、日本と中国の間の特別な帰属関係に位置している。「台湾割譲」を知らされた時、章炳麟は強い怒りを覚え、清朝政府を厳しく糾弾したが、皮肉にも、今度はその台湾に避難せざるを得なかった。そこでこそ清朝政府の監視と抑圧から逃げ、かつ中国語による著述と発表を続けることが可能であるからである。台湾は章炳麟にとって、中国から割譲されたものの、完全な外国ではなく、ちょうど中国と外国の中間地帯にあり、中国と外国を考えるには両方から距離を取れる場所である。一八九八年十二月四日、章炳麟はそこに到着した。それは、章炳麟にとって、はじめて中国本土を離れ、違う環境から中国を考える経験となった。

本人の後年の回想では、台湾に行く際に、彼にとって英雄である鄭成功と顧炎武のことが念頭に置かれていた、と

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

いう記載がある。つまり、鄭成功のことを実地で考察し、理解を深めるとともに、顧炎武のように「躬ずから九辺を歴し」、「世変を覘ったことに倣おう」と計画されていたのである。⁽¹⁵⁾ 慌しく亡命を決める中、そのような計画が果たして考えられたかどうかは考察不可能であるが、台湾滞在を通じて、章炳麟は「排滿」へより一步進んだという結論は、多くの根拠から裏付けられる。しかし、それは必ずしも彼自身が回想談で示したような明確な姿勢ではない。章炳麟は復讐の感情を高めつつも、清朝の枠内で問題を処理する可能性をなお完全に否定しておらず、その希望を放棄してはいなかった。それによって、時には相矛盾する態度が現れたこともある。その揺れを解明するには、台湾滞在時期の資料が必要である。

章炳麟は前出の山根虎臣と安藤陽洲の紹介で『台湾日日新報』での職を得た。⁽¹⁶⁾ 職名は記者であるが、取材ではなく、中国語ページに評論などを書くのが実際の仕事である。そこに掲載した文章は、『廬書』に収録されたものを除き、その多くは長い間知られておらず、それに関する研究はまだまだあまり見られない。『章太炎全集』さえ、その時期の文章をほとんど収録していない。⁽¹⁷⁾ しかし、台湾滞在中の章炳麟思想の変化を見るには、その資料が必要不可欠である。以下は、『台湾日日新報』の掲載文を中心に、『清議報』の掲載文や友人への手紙なども利用しながら考察していく。

台湾滞在中の章炳麟は変法運動それ自体には懐疑的であるが、避難中の変法派の人々には同情的であり、政府の行為に批判的である。とくに、戊戌政変後の災難と恐怖はその姿勢を強化させたのである。台湾に到着した直後、清朝政府が亡命中の康有為らを逮捕ないし殺害せよと東京公使に指示したというニュースを聞いて、章炳麟は国際法によってその指示の不当性を指摘した。⁽¹⁸⁾ 章炳麟は台湾から康有為らに手紙を頻繁に出し互いに励ましあい、情報交換をして

いた。しかし、そのやりとりの中では、康有為からは今後の活動、とくに光緒皇帝の救出について熱心に語られているのに対して、章炳麟はそれについてほとんど答えもせず、友情と身の安全に手紙の内容が止まっている。それは引き続き変法維新の道をともし歩むことに對して保留的態度を取っていた証明である。感情的には清王朝に敵意を抱きながら、新たな道と指導者が見つからない状況の中、章炳麟は変法維新に近い立場を引きずっていた。

その立場は、彼による康有為と孫文に対する評価を比較することによって、より明らかになる。章炳麟は孫文の志に對して理解を示していたが、その行動については、「医学の小技」で民衆を鼓動するとしか見ていなかった。民衆蜂起が中国に利益をもたらすかどうかは確信できないため、孫文に對する評価は控えられていた。一方、康有為については「万民倚頼の身」といったような多大な賛辞を送った。さらに、その二人を比較する際に、章炳麟は「輿薪と秋毫」という比喩を使い、孫文が康有為に比べられない小さいな存在にすぎない、と見ていた。⁽¹⁹⁾ その二人が象徴した理念から見れば、その時期の章炳麟においては、詩を通じて表出された排滿的感情を確かに抱きながらも、理論上では、革命へ走ることをまだ考えていなかった、といえる。

しかし、それと同時に、改革の失敗を反省した意も込めた「祭維新六賢文」において、章炳麟はすでに、「神州之命、制於朔方（中国の命は滿州族に握られている）」⁽²⁰⁾ という表現を使った。そこには、変法運動の挫折は、彼の中の滿州族に對する反感と敵意を増幅していたことが窺える。『台湾日日新報』の掲載文を資料に基づいて見れば、その時期を通して、「排滿」まででは言っていないが、漢民族と滿州族を対立させて捉える図式はすでに固まっていた、といえる。それは、同一人物に對する二分した評価において容易に見出すことが出来る。

これは支那に對して、確かに功と罪が半々であるが、しかし清室に對しては、まさに鄭侯、子房に比べられる

(存在である)⁽²¹⁾。

ここで引用した内容は、慈禧に殺された肅順のことに對する評価である。肅順の功績は、「清室」においては偉功となつてゐるが、「支那」においては半分が罪である。同一人物の功と罪は「支那」と「清室」に分けて測られてゐる。このような分け方は、兩者の利益が対立していることを前提としてゐることは明らかである。世界情勢や中国の将来を論じる際にもこのような分け方が取られている。

支那は宮廷の政變後、賢才はすでに殺され、王化は抹殺され、内部は腐乱した魚のようになってゐる。蘇丘の上、満人は滅ぼさないであろうが、夏子の末裔は滅ぼしていくのであろう。⁽²²⁾

ここで対立させてゐる「満人」と「夏子の末裔」は、つまり満州族と漢民族である。このままでは、満州族は存続できるかもしれないが、漢民族は滅亡していくぞという痛切な警告は、換言すれば、二つの民族は一つの運命共同体ではなく、将来は正反對の道に分かれていくのであろう、ということである。それは明らかに兩者が共存できない運命にあるということを前提にした判断である。

それについて最も強烈かつ明白な表明は一八九九年一月一日の「正疆論」である。

春秋の義では、復讐は九世に至る。これゆえ、吾が支那と満州は、共に天を戴くことも、共に后土を踏むこともしない。⁽²³⁾

「支那と満州」は、あらゆる利益と運命をともししておらず、一つの国の中に納めることは不可能であり、兩者はもはや分離するか前者が後者を転覆するしかない、と考えられている。それを果たすために、満州族への復讐が呼びかけられている。大變動を起こさなければならぬと認識しているものの、変法維新にも革命にも疑問を抱いている

中、支配者に対する敵意が、改革や革命の情熱を超えて章炳麟の中で独走しているように見える。

章炳麟は台湾に行く前に、台湾の歴史上に出現した満州族の支配を受けていなかった政権の存在に憧れていた。⁽²⁴⁾台湾滞在の経験を通じて、彼は鄭成功のことをより身近に理解し、その存在の意義を高く評価した。鄭成功とその継承者は二〇年以上にわたって台湾を根拠地とし、明朝が滅んでいたにもかかわらず、明朝に忠誠を誓い、その年号を使い続け、大陸に戻って明朝を回復することを目標にしていた。章炳麟は、その「抗清復明」の事業に感銘したが、それ以上に絶賛を送ったのは、「衣履弗改、共和弗革」という政治と文化を存続させた功績である。⁽²⁵⁾その功績を記念すべく、彼は台湾で鄭成功を祭る祠院を建てるべきだと提案した。

主に日本人ルートを通じて、章炳麟は、川口長孺の『台湾鄭氏紀事』と張斐の『莽蒼園文稿彙余』をはじめとした台湾での「抗清復明」の歴史に関する多くの資料を新たに入手し、多くの新しい発見と出会った。川口長孺の『台湾鄭氏紀事』は明王室の後裔や鄭成功の後裔との関係について新たな知識を章炳麟に与えた。清朝の従来⁽²⁶⁾の歴史記述では、朱一貴は「寇盜」と見なされてきたが、章炳麟は台湾で、朱一貴が明王室の後裔と称して蜂起したことを考証し、その朱一貴が民衆に擁護された本当の明王室の後裔かもしれないとまで推測した。張斐は明朝が滅亡した後、長崎へ渡り、武力で明朝の回復を謀りつつも叶わないまま日本に歿した人で、その詩文集『莽蒼園文稿彙余』は江戸時代の日本で出版された。章炳麟はそれを『明史』、『台湾鄭氏紀事』、宇佐美充による『莽蒼園文稿彙余』の後書きと照らし合わせて関連事跡を考証した。『莽蒼園文稿彙余』への感想文において、章炳麟は張斐の精神と行動に刺激され、復讐の感情を抑えられなくて、ついに清朝の康熙年号を「虜康熙二十五年」と、清朝朝廷を「虜廷」と呼んだ。⁽²⁶⁾それは章炳麟において、はじめて「虜」という字を清朝とその皇帝を呼ぶ用語の頭に付けた表現である。

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

章炳麟は、その英雄たちの夢を實現できるチャンスが何回も逃がされたと嘆いた。彼が挙げたチャンスとは、曾国藩や張之洞のような実力者が漢民族自前の政権を建てる可能性があったことである。しかし、曾国藩や張之洞は満清の政権の中で高位に登り詰めた漢民族の官僚であり、満清政権に抵抗できる実力を備えていたにもかかわらず、叛逆しようとしなかった。章炳麟は、それを漢民族の期待を裏切った罪として非難した。

もし、武昌に賢帥がおり、民の耐え切れない気持ちに乗り、兵を挟んで西へ進み、駐防に罪を問い、その兵宮を焼き、その將軍を殺し、そして江漢を振起し、朔を改め服を換り、逐満を以て自任するならば、これは良き機会と言えらる。……（しかし、曾国藩は）その時を以て金陵に号を建てようとせず、首と心を下げて辮髮の辱胡に奉仕した。それは、大義に無知であり、中国に無窮の患を遺した⁽²⁷⁾こと甚しい。

このようなチャンスが利用できない原因は、彼らが「忠君」と「愛国」を区別できないことにある、と章炳麟は分析している。「忠君」につながらない「愛国」を前提に、その「国」とは、清朝ではなく、漢民族自前の国を指すこととなり、満州族の君主に忠誠心を抱くことは逆に、国を害することと見なされる。そのため、「たとえ今日天下皆曾文正であっても」、「漢唐の旧宇を回復するには足りない」、と指摘⁽²⁸⁾されている。章炳麟は、実力だけでは不十分であり、民族意識を呼び起こすことの重要性を強調している。

ここでは、「逐満」という言葉がはじめて使われている。それは、満州族を駆逐する民族隔離ないしは民族浄化に近い意味合いであり、感情的な「讐満」より一步踏み出した表現である。心理の「讐」から行動の「逐」へと言葉を切り換えたことは、章炳麟の民族論が感情のレベルから行動のレベルへと上がってきたことを意味している。

しかし、「逐満」という課題を実行に移すには、章炳麟はなお躊躇していた。「逐満」を本当に実行すれば、両民族

とも多大な災難を被り、中国は分裂して弱体化しかねない、と章炳麟は危惧していた。しかも、漢民族官僚は張之洞のように、実力があっても叛逆の意思がないものばかりで期待できない。孫文が鼓動しているような民間の一揆にも成功の確信がない。しかし、危機状態にある中国は変えなければならぬ。そこで、章炳麟は自らの案を考え出そうとしていた。

「客帝論」は奇抜な発想であり、前例のない体制構想である。漢民族が「地主」であり、孔子の末裔を「共主」と立てる上、清朝の皇帝を「客帝」として認めようという提案である。章炳麟が定義した「共主」は正統性の最高象徴であり、それに対して、「客帝」は一段下げて相対的な存在となり、いわば皇帝という名の最高官僚である。こうした支配構造は、皇帝の正統性と絶対性を根本から否定した上で、一種の再契約によって、中央政府を管理、運営する権力を条件付で清朝皇帝に再付与する形になる。その提案に期待されたのは、皇帝を「客帝」にすれば、満州族と漢民族の自滅的な紛争が防がれ、中国の分裂が避けられるということである。章炳麟は、光緒皇帝が「二百五十年間の過ちを悔やみ」、「地主」である漢民族に昵づき、賢明で積極的に改革に取り組めば、現体制を利用して外国の侵略に抵抗できるような中国を再建する可能性がまだ残っている、と考えていた。

「客帝論」は章炳麟が例証したように、周末とかつての日本の支配構造からヒントを受けたものである。周末では、諸侯が地方政治の実権を握り、その盟主が中央政府の役割の一部を担当しており、王は最高地位を象徴的に保ちながら、実際に行使できる権力は極めて限定的である。一方、明治維新以前の日本は、実際の中央政権は将軍が担当し、天皇は正統を保つ名分のみの象徴であった時期が長い。「客帝論」の中の「共主」をそのような周王と日本天皇に擬似して見ることができれば、清朝の皇帝は諸侯の盟主や幕府の将軍のような存在となる。そして、孔子の末裔を「共

主」とすれば、歴代の王朝交代は日本の幕府將軍の政權交代と同じ性質の政治事件となり、中国に「二千余年而未嘗易其姓」という新たな連続した歴史の系譜が立てられる。それは日本天皇の「万世一系」に近いものである。

「客帝論」は改革論でありながら、康有為らの変法論と明らかに異なる。康有為が「万世一系」を構築しようとした系譜には、日本の天皇に当たる地位が清朝の皇帝に与えられており、事実上の満州族支配の永続化になりかねない。それに対して、章炳麟に再定義された清朝の皇帝は、相対的な地位に一段下がって、「客」である故に、その地位は正統性と絶対性を持たず、暫定的、非主体的であり、条件に満たない場合いつでも降ろすことができるものである。こうした「客帝論」は、清朝の皇帝の限定した支配権を認めながら、革命への道も開いている。

「客帝論」は結果的に現在の皇室の政權担当を容認するものとなるが、論文の中では、「逐満」の正当性は、それによって否定されたわけではない。「逐満」を扇動するにも十分な清朝非難の表現は、論文の中に随所に見られる。「客帝」という言葉において、清朝の皇帝はすでに外国人と見られている。しかし、中国の分裂と弱体化を避けるために、現体制をうまく利用できれば、最もリスクの少ない道となりうる、と章炳麟は考えていた。それはぎりぎりまでの妥協案である。「客帝」への配慮もあって、論文の初稿はそれまでの忌諱的な用語用法と同じように、満州族に言及した箇所はモンゴルという語によって取り替えた。しかし、論文の中で警告したように、「逐満」を実行するかもしれないかはいくまでも「客帝」の決断と作為を見てから判断するものであり、それはいわば最後の通告ともいえる。実際にも、章炳麟において、「客帝論」は清朝皇帝の存在を容認する最後の言論となった。

「客帝論」と組み合わせ、あくまでも「与不得已、官制不及改」という事態への改善の策として提案されたのは「分鎮論」である。当面の力では中国が列強に勝てないのであれば、この国を外国人に差し出すよりも、六つの地域

に分けて地方の実力者に与えるほうがましである、と章炳麟は大胆に主張した。⁽²⁹⁾それは封建制と連邦制からの発想であるが、地方政府に領土主権まで極めて大きな権限を与えるのは特異である。その体制の下、中央政府による外国への領土割譲ができなくなり、そして、地方政治の多くは実際に漢民族官僚が担当している当時の現実から見れば、「分鎮論」を実行できれば、政治権力の多くは事実上漢民族の手に握られることになる。それは「客帝論」と合わせて見れば、孔子の末裔および地方実力者にまず権力の大部分を移譲し、漢民族の手で中国の再生を図るという目的がはっきり見えてくる。孔子の末裔に移譲するのは名義上の象徴的地位であるが、漢民族実力者に移譲するのは実権である。その名と実との二つの面を合わせれば、それは、清朝皇室から政権を奪い、皇帝を棚上げすることとなり、事実上の漢民族の復権である。「客帝論」と「分鎮論」は清朝の枠組みを温存した改革論であるものの、清朝政府の存在を極限まで空洞化し極小化する意図がある。そこからさらに一步を進め、形式的な清朝の存在を容認するという最後の一線を越せば、その出口はもはや排滿革命しかないであろう。

そのような考えを背景に、章炳麟は台湾の帰属問題について再検討していた。日本は、その時の章炳麟にとっては滿州族より近い存在である。どうせ異族の手に渡すならば、滿州族に渡すよりも日本に渡したほうがましである、とまで言い切られた。

(台湾は) 日本に帰属するのは誠に、中国に帰属するのに及ばない。しかし、滿州に帰属するよりは、むしろ日本に帰属するほうがよい。⁽³⁰⁾

このような認識においては、滿州族の支配正当性はもはや論外とされたように思われる。日中問題は本来日本と清朝の両極間の関係であるが、章炳麟は中国を清朝から切り離すことによって、それを中国―日本―滿州族という三角

関係に切り替えたのである。その三角関係において、台湾は特別な存在となり、多くの可能性を示唆した中心的な場所ともなっていた。

台湾という一角は、日本と中国の聯邦の地となすべきであり、満州に対しては枕戈の讐（を持つ）⁽³¹⁾。

章炳麟にとって、台湾の現状は何よりもまず満州族が支配していない漢民族の地域であることに意味があり、日本に占領されているが、そこそ日本からの協力を得られる場所である。明末清初には、鄭成功や張斐のように、台湾と日本をうまく利用して「抗清復明」を謀ろうとした歴史の経緯がすでにあったからである。ここでは、章炳麟において、清朝臣民としての帰属感がほぼ完全に失われたことが窺われる。清王朝と共有できるところが次第になくなるにつれて、章炳麟は自らのアイデンティティを新たに構築しなければならなくなっている。

その章炳麟は館森鴻をはじめとした当時台湾に滞在した日本人と交友を重ね、日本における中国研究や明治維新などについて理解を深めた。一八九九年六月、章炳麟は館森鴻に同伴され、台湾から日本へ渡った⁽³²⁾。この第一回目の日本滞在はわずか二ヶ月あまりであり、その多くの時間は日本各地の遊歴と新知識の貪欲な吸収に使われた。その間、梁啓超の紹介を通じて孫文と知り合った。章炳麟は孫文に対して、「閃爍不恒、非有實際」という欠点を指摘しながら、流血の革命を経なければ中国の再生はないという持論を卓識であると評価した⁽³³⁾。

章炳麟は一時、日本国籍に入ることを勧められたが、拒否した。しかし、それは彼の自述によれば、「凡そ日本籍に入る者は、その多くが鄙棄される」というのが原因である⁽³⁴⁾。つまり、章炳麟は華夷思想あるいは近代国家の国民帰属意識によって入籍案を否定したのではなく、当時日本にいる華僑が差別されている状況を見てそれを否定したのである。日本における異民族の状況を自らの目で見た結果、彼には一つの国において多民族が共存しがたいという認識

が強まった。章炳麟が日本入籍案を検討したことは、清朝に帰属する意識がほとんどなくなったことの証明だといえる。しかし、その拒否の理由には、民族意識を増幅しながらも、彼の中に新たなアイデンティティがまだ十分に形成されていないことも示している。⁽³⁵⁾

清朝へ帰属意識がなくなり、日本への入籍も拒否した以上、章炳麟に残されたのは、自らの国を作るという選択のみである。

日本を離れる前に、章炳麟はそのはじめての海外体験を通じて考えた結論を「西帰留別中東諸君子」に次のように表現した。

何以贈君子、舌嚙不敢告。

(何を以って諸君に贈ろうか、口を止めて敢えて告げられない)

弓月保東海、蚡冒起南岳。

(異民族を駆逐して中国を保護し、楚厲王のように南中国から興起する)⁽³⁶⁾

もう一つの旅立ち…章炳麟とその「君」、「師」、「友」

章炳麟は台湾と日本の滞在を経て、清朝の枠内での改革を否定し、漢民族の国を新たに作ろうという結論に達した。帰国後、章炳麟はその結論を実行に移そうとして、一九〇〇年六月、清朝から独立して、「明絶偽詔、更建政府」を勧める手紙を李鴻章と劉坤一に送った。⁽³⁷⁾ 孫文を「蓋不能為張角、王仙芝者也」と判断してから、章炳麟の目には漢民

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

族の実力者官僚しか映っていない。その候補となっているのは、李鴻章、劉坤一、張之洞の三人である。張之洞に対しては、一八九八年にその叛逆の可能性をすでに否定したので、李鴻章と劉坤一に建国の希望を託してみたいというのが、章炳麟の当時の思いである。

しかし、その時点の章炳麟の意図は単なる漢民族の国を建てることに止まっており、どのような国を建てるかについては提案していない。それは「易姓革命」という言葉にちなんでいえば、単なる「易族革命」にすぎない。その内実の欠如は、章炳麟の中に排滿思想が確定したが、革命思想がまだ導入されていないことを示している。

章炳麟の上書行動は一面、彼独自の「失機論」、「藩鎮論」、「分鎮論」に基づいたものである。⁽³⁸⁾しかしその行動はもはや権力再分配のための提案ではなく、地方官僚の叛逆と独立を扇動するものとなった。その扇動が何の実りもなく、空振りに終わった結果、章炳麟には、体制外の人とともに革命するという最後の道しか残らなくなった。

「客帝論」ではすでに、「私が提案したのは、奮起して努力する『客帝』のためであり、怠惰と安逸を貪る『客帝』のためではない」とあり、それは「客帝」の奮起を最後の通告のように促したものと見える。⁽³⁹⁾しかし、一九〇〇年の年初、未遂に終わった光緒皇帝廢黜クーデターを通じて、変法派の希望の星である光緒皇帝の無能さが証明された、と章炳麟は見ており、それによって「客帝論」の実行可能性も消えた。さらに同年、八国連合軍が北京に入城し、清朝の権威に決定的な打撃を与えた。その事件を通じて、章炳麟は「亡国の兆は火を見るより明らかだ」と見抜き、清朝政府のままでは国家維持は不可能である、と断定した。⁽⁴⁰⁾さらに、事件の中の民衆の反応を見て、「満州を駆逐しない限り、士人たちの愛国心と民の敵愾心を求めても不可能であり、中国は次第に侵削され、結局欧米の陪隸となってしまうだろう」と章炳麟は痛感した。⁽⁴¹⁾高田淳の解釈によれば、ここでの「陪隸」とは、「欧米に従属する清朝にさら

に隷属することをいう」言葉である。⁽⁴²⁾ 義和団は清朝政権を欧米列強に対立するものと見なしていたのに対して、章炳麟はその事件を通じて、清朝政権と欧米列強はむしろ共犯者であるのみならず、漢民族が清朝の奴隷となっており、その上で、清朝が欧米の奴隷となっている構図を見えた。こうした認識には、その二重構造に支配されている中国人は二重の奴隷となっているため、欧米の奴隷にならないようにするには、まず満清の奴隷にならないことが先決条件となっている。

変法派の中にはすでに、欧米に対抗するには清朝を利用すべきであるという主張が暗黙のうちに了解されている。そこでは、清朝はすでに道具化されている。それゆえ変法派に対して、「保中国不保大清」という非難が政権側から発してきたわけである。義和団は最終的に同様の行動趣旨を取ったと理解することもできる。「扶清滅洋」をスローガンとして挙げた義和団にとって、満清王朝はまだ支持対象であるが、しかし、「扶」という動詞から伝わってくる意味合いには、倒れそうな「清」が主体ではなく、「滅洋」のための道具であり、「扶清」が「滅洋」のための手段であり、そのプロセスの一過程である、という解釈の可能性も含まれている。⁽⁴³⁾ ところが、「清」と「洋」は共犯者であるという章炳麟の認識においては、たとえ欧米列強に対抗しようとする目的においても清朝の利用価値がなくなっている。支配構図の上層にある欧米列強に対抗するためには、その下層に位置する清王朝をまず倒さなければ不可能であるということになっている。この認識が確立されたところで、満清王朝の最後の支配根拠と利用価値が崩れ去り、革命が正当化される。

ここまでの章炳麟の思想変化を振り返って要約すると、まずは満州族への復讐感情を抱き、次に、漢民族の地位の回復を主張し、民族対立の構図を強化しながら、清朝の枠内でその主体性を確立する方法を提案した。「客帝論」は、

せめて名義上の漢民族の国を回復しようとし、「分鎮論」は事実上の支配権力を漢民族へ奪回しようとした。しかし、「客帝」にも「藩鎮」にも期待できなければ、自ら奮起して革命するしかないという最終結論に到達するのは当然な道程であろう。清末の多くの人と異なって、章炳麟においては、漢民族の国を作るべきという判断は、革命の道に直結したわけではない。例えば、漢民族自前の専制王朝なら、章炳麟にとっては容認できないものとはまだ言い切れないからである。「排滿」、「革命」、「共和」が一つの課題として統一される最終結論に至るまでには、まだ彼なりの道があった。

一八九九年から一九〇〇年までのこの短い期間中、章炳麟の文章は、その立場が微妙に揺れながら、排滿革命路線へ傾斜していく過程を見せている。『廬書』はその軌跡をはっきりと示している。『廬書』に収録された文章はもともと、個別で発表された時、清朝と滿州族への直接言及を回避するために、「元」や「モンゴル」というような言葉を用いて回して採用していたが、初刊版『廬書』が編集出版された時、それらの箇所は修正され、直接に「清」と「滿州族」に変えられ、清朝皇帝は「大酋」と呼ばれた。同じ文集の中でも、各篇の立場は微妙に異なっているが、排滿革命という点において、所収文章の初出時点より強い傾向を示した。まもなく再刷された際に、「字隱」と「辨氏」が加えられた。その二篇には、こうした傾向がより明白なものとなっている。一年後改訂版『廬書』が出版され、文集の最初に置かれたのは「客帝論」と「分鎮論」についての自己批判文としての「客帝匡謬」と「分鎮匡謬」であり、その最後に置かれたのは「解辮髮」であり、その他の所収論文にも修正を加えられた。その改訂は、排滿革命の色を全面的に出し、それ以外の提案をすべて否定した形となっている。

一九〇〇年七月、章炳麟は唐才常主宰の「中国国会」を脱会し、辮髮を切り捨てた。その事件の中で書かれた「請

敵拒満蒙人入国会状」と「解辮髮」は『扈書』の二つの「匡謬」と並び、一九〇〇年の章炳麟の「排満」宣言となった。それは、清朝の臣民として生きていくことを完全に拒否し、漢民族としてのアイデンティティが確立したことの象徴といえる。

「中国国会」の宗旨は少し前の章炳麟なら受け入れられるものであるかもしれない。「光緒皇帝の復辟を要請する」という項目以外、後の革命派の主張と似たようなものが多くある。そこで提示された政治は、光緒皇帝の擁立のもとに、「国会」に具象される民権の伸張とともに、立憲君主政体の中に君臣の大義も存続させるというものである。⁽⁴¹⁾しかし、排満の道を決めた章炳麟にとって、「満清政府の中国支配権を認めない」と表明しながらも、光緒皇帝を擁護するのは自己矛盾であり、そのような清朝に対する未練が「排満」を妨害していることは紛れもない。それを止すために、章炳麟は次のようなことを「中国国会」の宗旨として立てようと要求した。

支那拯救のためであり、建虜拯救のためではない。漢民族振起のためであり、東胡振起のためではない。⁽⁴⁵⁾

それは、章炳麟が台湾滞在時期に明確化した漢民族と満州族の区別と対立の構図を実際の行動に移そうと、メンバー全員に要求したものである。彼はその対立と区別に基づいて建国を考えはじめたこの時期に、それをまず「中国国会」の組織原理として確立せよと呼びかけていた。そのため、彼は、全面対決という姿勢の明確化と同時に、満州族とモンゴル族の人からの入会をすべて拒否すべきである、と主張した。それは組織における民族の浄化を図るものであると考えられる。それについての同意を得るため、彼は復讐の感情を全面的に表し、かつてない激しさで漢民族としての記憶と感情に訴えた。

ドルゴンが入関して以来、我が疆土を盗み、我が人民を殺した。揚州の屠、江陰の屠、嘉定の屠、金華の屠、

章炳麟における排満思想の形成とアイデンティティの変容

広州の屠、血が足を隠すまで流れ、死骸が積まれて阜となった。枕戈の恥じ、銜骨の痛み、ついに忘れられるか？さらに、彼らは媚びへつらう人を任用し、聖諭を以って民を愚かにし、科挙を以って士大夫を束縛している。租税の半分は駐防に供え、野原は荒らされて圜地となっている。⁽⁴⁶⁾

群公辛苦懷忠憤、尚憶揚州十日否？

(諸君は苦勞して忠憤を抱いているが、揚州十日の悲劇はまだ憶えているか)⁽⁴⁷⁾

以前のような言い回しなどはもうまったく見られなくなり、清朝の支配が全面的に否定され、怒りと憎みがついに爆発したようである。にもかかわらず、章炳麟の要求は「中国国会」の同人たちに受け入れられなかった。章炳麟は彼らに失望し、清朝支配のシンボルともいえる辮髪を切り捨てて脱会した。

満州族の中国支配は身体に対する支配から始まったと言ってもよいであろう。満州族の独特なヘアスタイルである辮髪は、帰順を表すための絶対不可欠の意思表示として強要され、それに抗して漢民族は多くの命を失った歴史的経緯がある。章炳麟のような文化的象徴意味を重要視する人にとって、それはまさに「衣冠喪失」、つまり文化の墜落を意味したことにちがいない。台湾滞在中、鄭成功を評価した際に、「衣履不改」を重要な功績と見なしていたのもそのためである。清朝における辮髪象徴的な意味から見れば、その時期の「割髪与絶」は、清朝との全面対決姿勢を打ち出す象徴的な行為であり、きわめて強いメッセージを発信しようとした行為であるといえる。⁽⁴⁸⁾二五〇年くらいにわたって習俗化してきた辮髪を切ることは、反逆罪で捕らえられる危険に敢えて晒される献身的な勇気を要する行為である。それによって、章炳麟は清朝の支配を拒む不退転の決意を表明し、自らの過去の思想も一挙に清算したのである。

しかし、章炳麟において確立されたその漢民族としてのアイデンティティは特に新しいものではない。それはかつて清朝の臣民としてのアイデンティティと共存していたこともあったからである。章炳麟における排満思想の形成過程はその二つのアイデンティティが格闘していた過程とも言える。疑問と困惑の時期では、その二つを調和することに章炳麟は努めた。そしてその後、漢民族としてのアイデンティティが優先され、逆転現象を見せた。やがてそれは排他的な唯一のアイデンティティとなった。

唐才常をはじめとした「中国国会」のメンバーたちは当時においてすでに、清朝国内では急進的と見なされていたが、その人たちと物別れした以上、章炳麟にとって、共闘できる人はもはや孫文しかない。章炳麟は早速、孫文と連絡した。その手紙には、なぜ排満革命を決めたのかについて、章炳麟自身による分かりやすい説明がある。

今日、滿政府は狂って理に背き、恣意的に行動し、ますます人理を失っている。八国連軍の進攻は、ついに国门に及び、覆亡の兆は、説明するまでもない。南方各省は、西人と約を立て友好關係を保っている。私はかつて劉、李二帥に上書し、偽詔を公に拒絶し、帥府を自ら建てよう（と勧めたが）、受け入れられなかった。東南大局もまた危ない。友人は中国議會を上海に立て……同会の諸君は、賢者は保皇を念とし、不肖者は保爵位を念とし、滿州を尊奉しないものはない。⁽⁴⁹⁾

章炳麟はその手紙で排満を決意した経緯を披瀝している。その中で、彼は滿州族征服への復讐というよりも、清朝政府が列強の侵略に抵抗できず、国家存亡の危機に対応できないという点を強調している。一八九九年から一九〇〇年までのこの短い期間中、章炳麟が「排満」へ急速に傾斜したのは、ここで表明したように、時勢の急速な悪化が大きな原因である。「排満」はこうした時勢に迫られた選択であり、中国を保護するための唯一の道と見なされている。

章炳麟における排満思想の形成とアイデンティティの変容

そこで示された章炳麟の「排滿」根拠は、主に三つの項目に集約できる。それはつまり、危機的な時勢、清朝の無能、そして異民族支配の不当性と征服への復讐である。前の二者は現実の判断であり、後者は感情とイデオロギー的なものである。後者のみ、あるいは後者優位の時期では、章炳麟の言論は「讐滿」である。危機感が高まり、清朝政府の無能を見抜いた時点から、それは「排滿」に進んだのである。その三項目は、後の排滿論に共通した立論の根拠ともなった。

一九〇一年、排滿の意志を固めた章炳麟は蘇州に向かって、詒經精舍時代の老師俞樾に面会に行った。ところが、彼を待ち受けたのは老師の厳しい斥譴であった。俞樾にとって、一人の正統知識人として、父母の国を離れ、日本や台湾といったような「異域」に入ったことはまさに「不孝」であり、皇帝を名指して批判したり、「排滿」を鼓動したりすることは「不忠」そのものである。俞樾は章炳麟を「不孝不忠、人類に非ず」とまでののしった。これは中国の伝統知識人にとって、あらゆる非難の中で最も嚴重なものにちがいない。

この非難を浴びた章炳麟は、老師の未曾有の怒りに驚きながら、妥協せずに反論した。反論の焦点は学問のあり方であり、そして、民族と文化との関連性である。章炳麟にとって、博学の老師が「華夷の弁」を十分に分かっているが、満清政府に奉仕していることこそ民族と文化の尊厳を傷付けるものであり、それを認識できなければ、いかに学問を精進しても無駄であろう。章炳麟は結局、老師の意見を受け入れようとはせず、自らが主張した通りに行動を貫いていくのである。⁽⁵⁰⁾

この師弟の間のエピソードに見えた衝突は実に、清末の社会全体に起こり、それからますます激化する衝突のある種の縮図ともいえよう。俞樾は民族と文化の尊厳と道徳・倫理の秩序を基準にして、章炳麟を批判していたが、まさ

に章炳麟もそれに基づいて自らの行為を介解したのである。問題は、その「民族と文化の尊厳」ということについての理解あるいは基準がまったく正反対の方向にあった、ということである。衝突は、まさにそこから発したものである。章炳麟は「謝本師」という別れの宣言で、兪樾の民族と文化についての立場を批判し、自らの固めた意志を再度表明した。「解辮髮」と「謝本師」はいずれも激しい語調で書かれたものであり、従来「天地君親師」という忠誠と奉仕の対象についての言い方でいえば、それらは「君」と「師」への絶縁状として、言い換えれば、従来政治と文化の立場から決別する宣言として受け止めることができる。

章炳麟は余杭、上海、武漢、そして台湾、日本を経て帰国してから、もう一つの旅をスタートしたのである。それは、地理ではなく、思想においての旅立ちである。つまり、中国という国に帰国してきたが、その思想が清朝という国の姿勢で出発した物となった。それを経て、章炳麟は清朝臣民というアイデンティティを徹底的に否定したのみならず、当時の現実およびその現実を支える文化も否定するようになった。そこから出発して、章炳麟は「光復」を通じて国家、文化そしてアイデンティティを再建しようとする道に入ったのである。

しかし、この時点で、排滿思想は世の中においてむしろ異端の極論に過ぎず、広範な支持を得られる状況ではなかった。章炳麟がしばしば嘆いたように、ほとんど共鳴する同志がいらないのは実情であろう。その「解辮髮」を掲載した『中国旬報』は興中会香港支部が発行した新聞であるが、それさえ「心ある読者はこれを読んで、過激すぎると感じられるかもしれない。われわれは章君の苦衷を察し、その要請を容れ、これを掲載した」という編集説明をわざと添付していた。

一九〇〇年から、章炳麟は排滿思想の理論化に入り、それを主題にした論文を続々と公表した。一九〇一年の「正論」はその第一声であり、近代中国においても排滿をテーマとした最初の政論文である。一九〇三年の「駁康有為論革命書」は、清朝の排滿論において、最も大きな影響を及ぼした専論である。そして、改訂版『嘯書』はその理論を多層にわたり精密化した文集となる。本稿は、先行研究との重複を避けるという一面もあり、章炳麟における排滿思想の形成について、理論化される直前までの時期に焦点を当たって分析してきたが、それ以降本格化した排滿論についての考察を控えることにした。

1 Benjamin Schwartz. *In Search of Wealth and Power--Yen Fu and the West*, Harvard University Press 1964. 平野健一郎訳『中国の近代化と知識人——嚴復と西洋』、第六頁、東京大学出版会一九七八。

2 この手紙は一九〇〇年八月九日の『中国旬報』第一九期に掲載されたが、手紙自体の日付は七月十四日である。なお、以下にも頻出する蔣氏とは、蔣良駟（一七三二—一七八九）のことであり、乾隆時代の国史館纂修。その『東華錄』はヌルハチから雍正までの歴史資料を編年体で編集した合計三三卷の著作である。

3 「致陶垂魂、柳人權二子書」、湯志鈞編『章太炎政論選集』上冊第一九二頁、北京・中華書局一九七七年。または章太炎著作編注組編注『章太炎詩文選注』第二三三頁、上海人民出版社一九七六年。一九〇六年八月二五日『復報』第五号に発表された時は「陶垂魂、柳人權」のところに「□□」とし、署名は「西狩」。いうまでもなく、ここでの歳は教え歳である。

4 「獄中答新聞報」、『蘇報』一九〇三年七月六日。

5 章炳麟「東京留学生歡迎会演說辞」、『民報』第六号（一九〇六年七月二五日）、前掲『章太炎政論選集』上冊第二六九頁。

6 朱希祖「本師章炳麟太炎先生口授少年事蹟筆記」、『制言』第二五期「太炎先生記念專号」。

7 章炳麟「先曾祖訓導君先祖國子君先考知臬君事略」、倪偉編『章太炎生平与學術自述』第二頁、江蘇人民出版社一九九九年。

8 「艾如張董逃歌序」と次に引用した兩詩とも、上海人民出版社編『章太炎全集』第四卷第二四〇—二四一頁、上海人民出版社一九八五年。「序」には「烏桓遺裔、蹂躪我族幾近三百年、茹毛飲血、視民如雉兔、今九世之讐讎不能復、乃欲責其忠愛！忠愛則易耳、其俟諸革命以後」とある。しかし、それは後から書き添えたものであり、当時の思いのそのままであるとは限らない。「艾如張」中の「變風終陳夏、生民哀以涼」と「大角出非辰、端門慟官厄」二句は、變法運動が慈禧太后の手によって失敗するだろう、という予言のようなものである。その典故の援用は非常に巧妙である。『詩經』の「變風」部分では、陳国の夏姬に関する二作が最後に作成されたといわれる。それは「變風終陳夏」の表の意味である。夏姬は「三代王后」といわれた人であり、慈禧太后を暗示する格好の古人となっている。「變風」は維新變法と解釈できるので、變法運動が慈禧太后の手によって失敗する、というのはその裏の意味である。「大角」は麒麟であり、ここは康有為を指す。この予言があまりにも的確であるため、発表の時に手加えたのではないか、との疑問も感じざるを得ないが、兩詩は当時孫寶瑄や宋恕に見せた記録があるから、ここはそのような疑問を問題外にする。

9 同上。

10 同上。

11 章炳麟「蒙古盛衰論」、『章太炎全集』第三卷第六一頁、上海人民出版社一九八四年。その「蒙古盛衰論」と前後にして、章炳麟は「回教盛衰論」、「東方盛衰論」、「東鑿」（「東」は日本を指す）を書いた。

12 「雜感」、『清議報』第二八冊（一八九九年九月二十五日）、前掲『章太炎政論選集』上冊第七四頁。または前掲湯志鈞『章太炎年譜長編』上冊第七四頁。「亥午」は革命の言い回しである。一八九七の「論学会有益於黃人亟宜保護」には、「吾聞『齊詩』五際之說曰：午亥之際為革命、卯酉之際為革政」とある。この詩は「將東渡台灣」の時に作られたものであり、一八九九年九月の『清議報』第二八冊に発表した時の署名は「西狩」である。このペンネームは「西狩獲麟」という典故から由来したものの

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

と考えられる。章の名には「麟」という字があり、この典故にまつわる孔子の物語によって複数の解釈が可能である。康有為の影響が反映されているとも考えられる。また、発表地の日本にいることを想定し、西の方向へ、つまり中国へ狩るとも読み取れる。「狩る」という表現はよく叛乱あるいは革命の言い回しとして使われる。このペンネームの最初使用例は一八九八年十月の『昌言報』に発表した「書漢以来革政之獄」であり、その時は「日本西狩祝予」とした。日本にまだ行ったこともないその時点の章炳麟はなぜこのペンネームを使ったのかについては、「西狩祝予」という日本人と偽って身元を隠そうという目的があるといえる以外に、何か深い意味があるかを判断するには、今のところでは資料が欠けている。

13 章炳麟「孫逸仙題辭」（一九〇三年）「案虜昌狂浪禹績、有赤帝子斷其噓。揜跡鄭洪為民瞻、四百兆人視茲冊」。原詩は宮崎滔天『孫逸仙』の巻首題辭である。前掲『章太炎政論選集』上冊第二五二頁。

14 上海租界は最初、「華洋分居」であったが、太平天国の戦乱時期の難民流入によって「華洋雜居」が公認された。租界には、最初に都市建設のために委員会を設置したが、それは次第に司法権、行政権、裁判権ないし領土主権を自己主張した。

15 「余杭章先生事略」、「制言」第二五期。

16 『台湾日日新報』は日本殖民政府が台湾にあった各新聞を統合した当時台湾の最大の新聞である。日本語四ページと中国語二ページから構成する。社長は守屋善兵衛、主筆は木下新三郎、中国語ページ担当者は主任編集の初山衣洲、台湾籍の謝汝詮と李書および章炳麟である。台湾滞在中の章炳麟の詩文は、主に『清議報』と『台湾日日新報』に掲載されていた。馮自由『中華民國開国前革命史』第四章「壬寅支那亡国記念会」及び馮の説に踏襲した一部の研究者はそれを『台北日報』としたが、誤りである。台湾での生活について、『民国章太炎先生炳麟自訂年譜』（台北・商務印書館一九七〇年）には「氣候が蒸し暑く、士大夫が少なく、半年居て、意興が無くし尽くした」というのの自述がある。章炳麟はそこで生活を楽しんでいないようである。

17 それについての紹介と研究は文瀾「章太炎寓台軼事」（台北『中央日報』一九五二年七月二十九日第六頁）、林蔡「章太炎文墨

在台湾」(台北『中央日報』一九六〇年十月十日第一頁)、阿川修三「『台湾日日新報』所載章炳麟の論文について」(『大塚漢文学会会報』第四〇号、一九七九年六月)、一九七九年六月、「戊戌政変直後の章炳麟——新資料『台湾日日新報』を中心に」(『現代中国』第五六号、一九七九年七月)がある。一九八三年、中国発行の『歴史論叢』はその「新資料」を掲載する際に阿川修三の「収集と発見」の功を特筆した。しかし、それから二〇数年間も経た今日、その資料を利用した研究は依然として希少である。

18 「国の門を一步も出れば、司法権は我に仮に借りるのでもできなくなる。公使はたとえ智勇とも人を超えたとしても、公法を抵抗し違反し、隣の国の支配地域に乱入することができぬのか。章炳麟「清廷偵獲通臣論」、『台湾日日新報』一九九八年十二月十六日。「章太炎先生清末旅台論文一束」所収、『歴史論叢』第四輯第二頁、齊魯書社一九八三年。

19 同上。

20 「祭維新六賢文」が『清議報』第七冊(光緒二十五年正月二十一日)に発表した時の署名は「台湾旅客」である。湯志鈞『章太炎年譜長編』上冊第七二頁、北京：中華書局一九七九年。

21 章炳麟「書清慈禧太后事」、『台湾日日新報』一九九八年十二月二十五日。「章太炎先生清末旅台論文一束」所収、前掲『歴史論叢』第四輯第一〇一一頁。

22 章炳麟「論華東三十年中之形勢」、『台湾日日新報』一九九九年一月二十九日。「章太炎先生清末旅台論文一束」所収、前掲『歴史論叢』第四輯第二四頁。

23 章炳麟「正疆論」、『台湾日日新報』一九九九年一月一日の元旦論説。

24 前引「艾如張」には「共和在海東」一句がある。それは鄭成功政権のこと指すものと思われる。章太炎著作編注組編注『章太炎詩文選注』(上海人民出版社一九七六年)第八頁「注⑥」は、「海東」は台湾と注したが、根拠は示していない。楊際開は「章炳麟為甚麼要『反滿』」(香港中文大學中國文化研究所、『二十一世紀』總第四六期、一九九八年四月)で、「海東」は台湾ではなく、日本であると判断した。その根拠は、章の友人である宋恕が明治維新を「攘夷尊皇」と「共和立憲」との二段階に分

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

けた際に「共和」という言葉があったことと、『廬書・冥契』に日本の政治を「貴族共和」と表現したことである。しかし、『台湾日日新報』の資料を使えば、それが日本ではなく、台湾であることを証明できる。たとえば、下にも引用した「台湾祀鄭延平議」には「衣履弗改、共和弗革」とある。また『廬書・冥契』には「成功之奉明朔、自擬以共和」とある。

25 章炳麟「台湾祀鄭延平議」、『台湾日日新報』一八九九年二月十六日。「章太炎先生清末旅台論文一束」所収、前掲『歴史論叢』第四輯第三六頁。

26 章炳麟「書『莽蒼園文稿彙余』後」、前掲『章太炎全集』第四卷第一九八—二〇一頁。

27 章炳麟「失機論」、『台湾日日新報』一八九九年四月五日。「章太炎先生清末旅台論文一束」、前掲『歴史論叢』第四輯第四九頁。

28 これを梁啓超の見方と比較すれば、その思想の相違を見える。梁啓超は「もし、曾文正は今日に生きており、しかも壮年であれば、中国は必ずその手によって救われる」、と見ていた。梁啓超「新民説・論私徳」、『新民叢報』第四〇、四一期合期（一九〇三年十一月二日）第八頁。

29 「瓜分而授之外人、孰与瓜分而授之方鎮」という論点は譚嗣同の「亡国論」から影響を受けたかどうかは実証できないが、ほぼ同じような発想が譚嗣同にもあった。章炳麟が李鴻章、劉坤一への上書はその発想によるものである。なお、章炳麟は日本、薩摩藩と長州藩を例として挙げて、「始於建功、而終於納土、何患自擅」と「分鎮」がもたらす分裂の可能性を否定した。

30 デリケートなところなので、原文を附する…「婦於日本誠不若婦於支那、而婦於滿州則無寧婦於日本」。前掲章炳麟「正疆論」。

31 原文は「台湾一隅、其当為日本与支那連邦之地、而視滿州以枕戈之警也」。前掲章炳麟「正疆論」。この論点は当時日本のアジア主義から影響を受けた跡がある。

32 館森鴻は、かつて詰経精舎で一時に章炳麟の同窓であり、章炳麟に台湾避難を勧めた人でもある。当時は、台湾総督府の学務官を務めており、台湾滞在中の章炳麟に最も親しい友人であり、章炳麟に日本行きを勧めた一人でもある。章炳麟と館森鴻

の交友については湯志鈞「章炳麟と鮑森鴻」（『歴史叢書』第三輯、齊魯書社一九八三年。『近代中国の革命と日本——湯志鈞論文集』所収、日本経済評論社一九八六年）参照。一説では、日本殖民政治批判の新聞記事をめぐって、民政長官の後藤新平に注意され、社長の守屋善兵衛と口論したのは台湾離れの原因である。日本での見聞については、章炳麟は「西京遊記」（『亞東時報』第一七号、光緒二十五年十二月十八日）でそれを記録した。

33 一八九九年七月十七日汪康年宛の手紙。「又致汪康年」、前掲湯志鈞編『章太炎政論選集』上冊第九二頁。

34 同上。

35 後年の章炳麟なら、それは考え余地がまったくないことだといえる。もちろん、それもまた近代国家の仕組みと国際秩序について、章炳麟の理解が未熟であることの証明である。また、朱舜水、張夔の時代には国籍の問題は存在しない。したがって、それは極めて近代的問題でもある。

36 章炳麟「西帰留別中東諸君子」、前掲『章太炎政論選集』上冊第九五頁。または前掲『章太炎詩文選注』第二六頁。

37 当時両広総督劉坤一と湖広総督張之洞は「凡二四日以後之上諭、概不奉行」と宣言した。イギリスは香港総督を通じて「革命党と李鴻章の連合救国」によって両広に独立政府を誕生させると計画した。李鴻章が諸総督との連衡を模索しているとの噂を聞いて、章炳麟は時機が来たと思った。劉師培は一九〇四年初、湖北巡撫兼湖広総督代理である端方にも、革命派への参加を勧める手紙を出した。章炳麟と同じように、相手にされなかった。

38 前掲「失機論」の他、「藩鎮論」、『五洲時事彙報』第四冊（一八九九年十月）、前掲『章太炎政論選集』上冊所収。「分鎮論」、『楯書』所収、前掲『章太炎全集』第三卷。

39 「客帝匡謬」、『楯書』改訂版所収、前掲『章太炎全集』第三卷第一一九頁。

40 前掲「客帝匡謬」、章炳麟「來書」、『中国旬報』第一九期、一九〇〇年八月九日。

41 前掲「客帝匡謬」。

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容

42 高田淳『章炳麟・章士釗・魯迅——辛亥の生と死と』第二一頁、龍溪書舎一九七四年。「陪隸」という言葉は単なる「奴隸」、「隸屬」とも解釈できるが、ここは高田氏の解釈を採る。

43 一九〇一年後、義和団も「扶清」のスローガンを捨てた。例えば、一九〇一年四月四川の義和団のスローガンは「滅清、剿洋、興漢」であり、一九〇二年直隸広宗鼎の景廷賓らのそれは「掃清滅洋」である。ただし、義和団の行動趣旨や目的についてさまざまな説があり、どれに依拠するかは、ここでは判断せずに、あくまでも一つ解釈の可能性として提示する。

44 すでに自立会の前身である正気会の章程を制定した時点で、曖昧にして中途半端な宗旨は一部の急進派の批判を呼んだ。ここでは、「低頭腥羶、自甘奴隸」、「非我族類、其心必異」という排滿論と、「君臣之義、如何能廢」という君臣倫理が混在している。馮自由によれば、興中会の会員である畢永年と唐才常との間に、それを巡る激論が惹起され、ついに、畢永年は絶望し、剃髪隠遁するに至った、という。馮自由『革命逸史』初集「畢永年削髮記」、同第二集「記上海志士与革命運動」の「正気会及自立軍」参照。その自立会を基に、「中国議会議」と自立軍という文武両組織が建てられた。章炳麟の要求は「中国議会議」の二度目の会合で出したものである。一九〇〇年八月の章炳麟のこの怒りは、正気会の時点で畢永年のそれに近いものといえる。

馮自由『革命逸史』、北京：中華書局一九八一年。

45 「請敵拒滿蒙人入国会状」、「中国旬報』第一九期。

46 同上。

47 前掲章炳麟「雜感」。

48 その影響を受けて、その後多くの人が排滿革命を志した時、断髪は一種の儀式となった。例えば、錢玄同は一九〇四年十八歳の時、「義不帝清」の志を表明するために、断髪した。「三十年来我對於滿清的态度的變遷」、「錢玄同文集」第二卷第一一一頁、中国人民大学出版社一九九九年。

49 章炳麟「來書」、前掲『中国旬報』第一九期。

50 このエピソードは章炳麟「謝本師」（『民報』第九号）、前掲『民国章太炎先生炳麟自訂年譜』、前掲湯志鈞編『章太炎年譜長編』に基づいて構成したものである。

章炳麟における排滿思想の形成とアイデンティティの変容